

子供が創る問いで、善さを追究する

～道徳性を養い高める ICT を活用した探究型道徳 「森のともだち」の実践を通して～

富山 実樹

はじめに～本研究の背景と課題～

道徳科が教科化され、様々な実践が全国的に広がってきているが、現場では、依然として道徳授業そのものが忌避されがちであるとともに、読みの登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われる例がある。指導要領でも新しい授業スタイルが求められていることが伺える。考える道徳、議論する道徳、質の高い道徳授業への転換が必要である。

本研究の目的

- ・道徳授業の質的変換を図る。
- ・新たな授業スタイルの確立。

そこで仮説を立てた。

仮説

- ・探究のサイクルの道徳授業を行うことで道徳性を養うことができる。
- ・ICT を活用して道徳授業を行うことで道徳性を高めることができる。

道徳性を養い、高めるとは

道徳性を養うとは指導要領に明記されているように、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的实践意欲と態度の三つの力を養うことである。

では、高めるということを自分なりに記したい。下の図はコールバーグの道徳性発達の三水準六段階の図である。道徳的行為の判断が他律的なものから、自律的なものへと段階が上がることを、自身は

道徳性が高まったと考える。小学生の一般的な発達段階としては、段階の1から3であると考えられる。

○「道徳性を高める」とは、

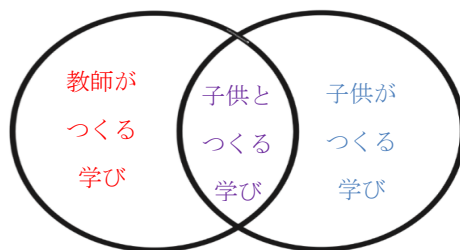
水準	段階	概要
前慣習的水準	1、他律的な道徳性	罰や制裁を回避し、権威に自己中心的、無条件に服従すること。
	2、個人主義、道徳的道徳性	自己の欲求、時に他者の欲求を道徳的に満たすこと。自分の利益や欲求に合うように振る舞うこと。
慣習的水準	3、対人的規範の道徳性	他者から期待されるよい役割を実行することが正しいことである。
	4、社会システムの道徳性（良心）	社会システムを維持することが正しいことで、社会における義務や責任を果たし、権威を尊敬し社会秩序を保とうとする。
慣習以後の原則的水準	5、人権と社会福祉の道徳性	一般的な個人の権利と幸福を守るために社会全体によって吟味され同意したものとして規範に従うことが正しいことである。全体の公益を志向する。
	6、普遍性、可逆性	人間性に関わる普遍的な倫理原則によって自らを導く。

より高次の思考へ

原コールバーグの道徳性発達の三水準六段階より作成（一部後略）

本校の研究テーマ「こどもとつくる学び」の捉えと育成したい子供像

授業者は「子供とつくる学び」を図のように、教師がつくる学びと子供がつくる学びが重なるところに実現すると考える。また育成したい子供の姿を踏まえて、道徳科における「子供とつくる学び」を以下のように考えた。



育成したい子供の姿

自ら問いを立て、課題を解決しようとし、他者と対話する中で、自分や友達の考えのよさをみつけながら、よりよい考えを追究しようとする子供

道徳科における教師がつくる学び

道徳的価値の理解を深めさせるということと、子供同士を繋げ、教師がファシリテーターの役割を担うということ、深める際に適宜子供の思考に寄り添った発問をすることである。

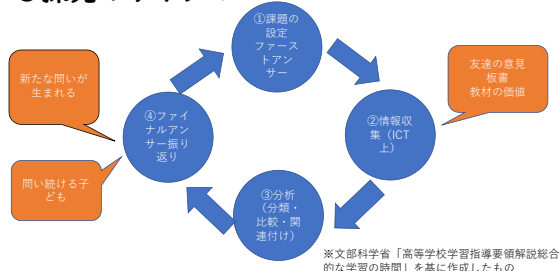
子供がつくる学び

探究的な問いを自ら立ててそれについて考える
こと、また学級全体で考えたい問いについて立
てること。

手立てについて

①探究のサイクルの運用

○探究のサイクル



探究のサイクルを以下の手順で道徳授業の中で運用していく。

探究のサイクルⅠ（課題の設定）

児童が考えたい、問いづくりをする。個人全体で立てる問いをつくった後、学級全体で考えたい問いを話し合いを通して設定する。

探究のサイクルⅡ（情報収集）

ロイロノートで学級全員の思考を収集する。

探究のサイクルⅢ（分析）

二年生の発達段階でできる範囲で分析を行う。ここでは収集した学級全員の児童の思考を意見の分類、比較、よりよい考えはどれかを考えていくことである。

児童の分析



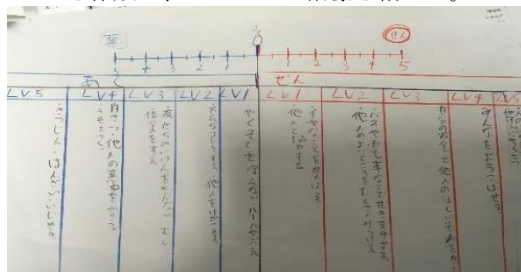
分析・ICT上の対話の仕方実際に出てきたもの対象児童：小学2年生



探究のサイクルⅣ(追究とふりかえり)

- ・よりよさの追究という過程

人はみな、個人の善悪の判断の物差しを持っている。この個人の善悪の判断の物差しの精度を上げていくことが道徳性の向上に繋がると考える。よりよい考えを追究していくために児童自身で善悪メーターを作成し、よりよさの指標を創った。



・子供とつくったよりよさの定義

道徳の四観点を参考にして、子供と共に定義した。

自分にとって、相手にとって、社会にとつて、環境にとって、他の生物にとって、ものにとってよいこと

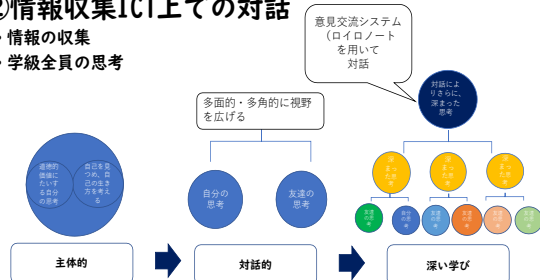
②ICT を活用し、分析する。(情報収集と分析)

児童が ICT を活用することで、多面的・多角的なものの見方ができるようになることを意図し、そのことで道徳性を高めることに繋げる。ICT を活用することで、全員の思考とタブレット上で対話することが可能になり、分析という過程を経ることで、思考が深まっていくと考える。

探究のサイクル

②情報収集ICT上での対話

- ・情報の収集
- ・学級全員の思考



③本時での単元計画の設定

段階	内容	探究のサイクル
一次	道徳的諸価値についての問いづくり・問の設定・ファーストアンサーを持つ。	①、②
二次	教材を読み、問いについて教材の価値を得て ICT 上で対話・分析とファイナルアンサー、よりよさの追究・ふりかえり	②、③、④

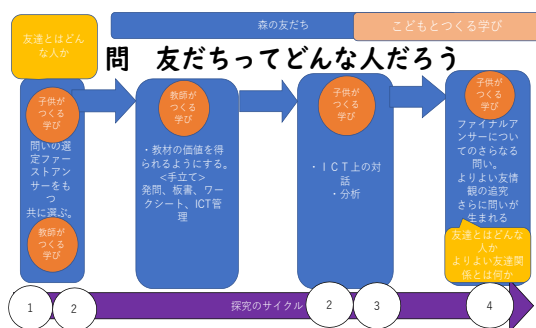
単元計画を組むことで、探究のサイクルを取り入れた授業を実践した。

授業の実際と成果

教材：「森の友だち」（廣済堂あかつき二年）

内容項目：友情・信頼

下図のような流れで授業を行った。



一次

個人の問いづくりと学級全体で思考する問いの選定をした。子供が一次で、問いを創り、話し合って、選定を行ったところ、学級全体の問いは、「友情・信頼の関係はどこで生まれるのか」に決定した。この問いを二次で全体の課題として掲げた。

〇児童が考えた実際の問い



二次 (本時)

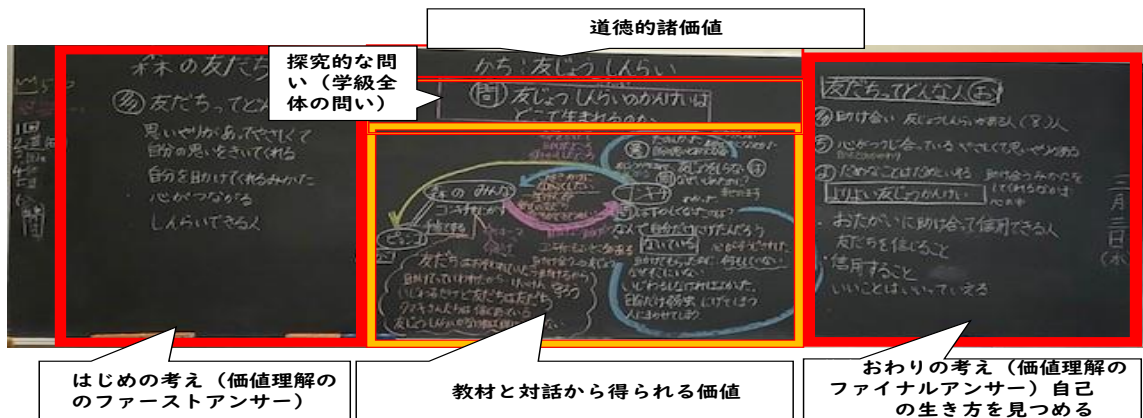
本時の目標：みんなを残して逃げてしまったコンキチの思いについて考えることを通して、仲良く助け合うことのできる友だちを大切にする道徳的心情を育む。前時でつくった問いを掲げて、授業を子供と共に創っていった。

・授業の展開

T：今日学ぶ価値はなんですか。

C：きょうの価値は「友情・信頼」です。

C：学級の問いは、友情信頼はどこで生まれるの



T: 前の授業で多くの人が疑問に思っている、問いですが、友だちってどんな人ですか。

C: 友達は自分を助けてくれる味方。

C: 心がつながっている人。

C: とても信頼できる人。

T: 今日は友情信頼の価値について考えていきましょう。このお話の中に友情信頼ってあるかなって考えながら読んで下さい。

T: (範読した後) 友情はありましたか。

あったと思う人 (C: 挙手する。)

どこにありましたか。

C: コンキチのまわりを動物たちがぐるぐる回って助けたところ

C: 動物たちがぴよんこに手当てしているところ

C: おおかみにやられたらかわいそうだから、助けたところ。そこで友情が生まれた。

C: 質問があるんですけど、p 94の16行目にはずかしくなったのはなぜ。—A

C: この話を読んでぼくが疑問に思ったことなんですけど、動物たちは、コンキチにいつもいじめられているのに、なぜ助けたのか。—A
ぼくが思うのは命は一つしかないからぐるぐる回って逃げさせたのではないかな。幸せのお王子と似ている。

C: あたらしい友だちができて、大喜びだから、助けたんじゃないのかな。

C: コンキチがにげられるようにしたのは、いくら悪い人でもいいところはあるから。

C 最初。友情を知らなかったと思う。

最後に泣いているのは、ぴよんこたちが助けるためにやったことで友情は大切だとわかったと思う。

T: コンキチはなぜみんなをいじめてたと思う。

C: ニュースでやっているところを見たんだけど、悪い人は楽しかったとか面白かったっていつてたからやったと思う。

C: コンキチがなぜいじめたかというところ、

自分通りにならなくて自分勝手にしていた。

T: さっきHさんがつくってくれた問いなんだけど、なんで森の動物たちは助けてくれるの？ 近くの人と話してごらん。(ペアトーク後) 言える人。

C: コンキチは森の動物たちをみんなをいじめていたけど、動物たちは、友達なのに、おそわれているのに何もしないのは友達じゃない。友達だったら助ける。

C: 教科書にのってないからわからないけど 前にもおおかみに襲われた経験があるんじ

ゃないかな。

C：助け合っている。友達は友達だから

C：信頼して、信じてたからもし、信じてなかったら助けられてなかったんじゃないかな。

C：仲良くしたかったから、このことをきっかけにコンキチとなかよくなれるんじゃないかなと思った。

C：さいしょコンキチは、心の中に虫がうじゃじゃいた。心が汚かった。そのあと、ちゃんとした畑みたいにきれいになった。本当はコンキチは、友達になりたかったと思う。

T：Mさんがさっき作ってくれた問いのコンキチが恥ずかしくなったのはなぜでしょう。

C：自分が助けてもらったのに、そのまま、お返ししないのは、はずかしい。

C：最初からいじわるしなきゃよかったって迷っているから。

C：自分だけ弱虫でみんなは勇気があるのにはずかしくなった。

C：自分はみんなにまかせてしまった。びよんこもけがしてしまって、自分は何もしていないからはずかしくなった。

T：最初の全体の問いに戻るんだけど、コンキチと動物たちに友情は生まれたと思う。生まれたとしたらどこで生まれた。—B

C：(どっちも。1人)(生まれた27人)(生まれていない4人)

助けたところ命を救ったところで生まれた。

C：みんなでひきかえしたところで生まれた。

T：生まれてないとおもう人

C：よくよく考えてみると生まれていないののではないか。森のみんなはコンキチがけがをしたから助けているのでは。

T：生まれていないと思う人はいつ生まれると思う。

C：いつもはコンキチが助けられていたけれど、
コンキチが今度びよんこを助けたら、その時友情が生まれるかも。—B

T：なるほどな。この後、助けたりしたら友情が生まれるのかもしれないね。

では、結局友達ってどんな人ですか。タブレットに書きましょう。そして分析をしたら、よりよい考えを見つけましょう。

(C 児童は分析を始める。)

T：分析結果を教えて下さい。

C：多い意見は友情信頼がある人。助け合っている人、自分を信頼できる人です。友情信頼がある人。ちがった意見だと思うのは、心が通じ合っている人やさしくて思いやりがある人です。

私は友情信頼だと思ったんですけど、Hさんは、自分の心の中のことを考えているのでそれがよりよいと思いました。

T：どの人の意見がよりよい友情関係だと思いましたか。

C：Aさんの意見のお互いに助けあって信用できる人です。友達を信用することと助け合うのが大切だと思う。—C

C：Aさんの意見がよりよい友情関係だと思う
お互いに信用していなかったら、なにが本当かわからないけど信用していたらいいことはいいっていえるし、わるいことは悪いっていえるから。—C

ICTを活用した探究型道徳の成果

・成果①～授業中に問いを創りだす子供—授業の実際Aの場面より

授業中に児童がお話についての問いを自ら創り出し、教師が考えていた発問と重なり、自然な形でその問いが子供の問いとなった。「子供とつく

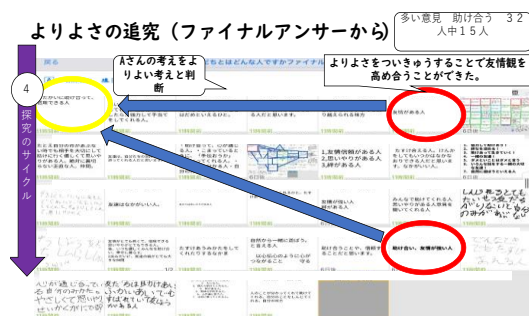
る学び」が実現され、探究型サイクルの成果を感じた瞬間だった。

・成果②全体の問いを設定していたため、価値への理解が深まった瞬間—Bの場面より

お話の中では、動物たちが友情観の手本であるが、コンキチは最後に友情の自覚し、友情観が芽生えているところで話が終わっている。全体の問いについて考えることでこの後に助け合いを通して生まれていくことを、子供が捉えた瞬間であった。

・成果③ICT を活用した対話の成果—Cの場面より

児童一人一人のファイナルアンサーでは浮き彫りにされなかったが、よりよい考えを問うと、友情信頼の価値の理解にいきついていたことがわかった。



成果④児童の変容

ICTを活用したことにより、多面的な思考の広がりを見せ、よりよさの追究の過程で児童が高め合っており、他者のより深い考えをよりよいものだと考えられた。児童は授業を通して、自ら問いを創れるようになった。また、授業のはじめと終わりの自分の思考の違いに気付くようになった。人物に自我関与しながら自分もことを話す児童が増えた。授業前は、価値への捉えが漠然としていたものが、授業後は価

値の理解を深め、自分の考えを具体的に書けるようになった。

・授業後の児童のふりかえりから (児童評価の視点)

- ・これからは、もうすこし友だちを大切にしようと思いました。(自己の生き方を見つめる)
- ・今までは、ただ友達は仲よくしてくれる人と思っていたけれど、今思うと友達はすごく大切で助け合って協力してくれたり、人のことを考えてくれる大事な存在だとわかりました。(価値理解)

○友情信頼のことをみんなの意見を聞けて考え方がふえたのでよかったです。(多面的・多角的なものの見方への広がり)

○これからは、だれにもやさしく、いじわるなどをせず、友情信頼が生まれるように頑張って生活したいです。(自己の生き方を深める)

検証と考察

児童対象のアンケート結果からの考察によると、ICT活用により、多面的・多角的なものの見方が促進されていることに児童の実感としてあることがわかった。また探究型サイクルが児童にとって、何をすることがわかりやすく、見通しを持って授業に臨めていることがわかった。

おわりに～今後の展望～

- ・本研究の有効性を示すため、検証数対象児童を、他学年でも行っていく。次年度も引き続き、本研究の検証を行っていきたい。
- ・道徳性の発達の段階の見取りは、今後その方法も含め、次年度に行っていく。

＜参考文献＞

特別の教科道徳 学習指導要領解説
小学生のどうとく2 (廣済堂あかつき)